

原著

## 動物をかこむ場の発話から捉える認知症高齢者に対する動物介在療法を目指した試み

河村奈美子\*

大分大学医学部看護学科

(平成 25 年 6 月 23 日受付／平成 25 年 12 月 30 日受理)

### Experimental Animal-assisted Therapy for elderly dementia people based on an analysis of utterances toward animals

KAWAMURA Namiko\*

School of Nursing, Faculty of Medicine, Oita University

(Received June 23, 2013/Accepted December 30, 2013)

**Abstract** : This study investigates communication characteristics during Animal-assisted Activity (AAA) for institutionalized elderly patients with dementia, using utterance communication as the main focus of this study. Study participants comprised four elderly patients with dementia. The AAA was conducted for a total of six times, every two weeks. A detailed analysis of the utterances of one elderly person and one volunteer was conducted during the AAA. The volunteer made a number of utterances to each participant. The utterances of the elderly participant increased, and the volunteer's utterances decreased. The volunteer estimated the mental status of the dog and presented several utterances about it to the elderly participant. The elderly participant was able to communicate with the help of the dog. Moreover, the elderly participant was able to emotionally comprehend another participant. This study concluded that elderly patients with dementia developed understanding each other and acknowledge their personalities.

Key words : Animal-assisted Therapy/Activity, communication, older people, dementia

*J. Anim. Edu. Ther.* 5: 1-12, 2014

#### I. はじめに

高齢者に対する動物介在療法 (Animal-assisted Therapy; AAT) や動物介在活動 (Animal-assisted Activity; AAA) は近年増加している。この活動の目的は、施設の限りある生活環境に少しでも変化を加えることにより高齢者の施設生活の質を高めるところにある。施設に入所している高齢者は、疾病による障害や身体機能の衰退だけでなく精神的問題を有し、それによりコミュニケーション上の障害を抱えている場合が多い。生活の場である施設においてコミュニケーション上の問題をもつことは、生活のやりにくさにつ

ながる。例えば、身体疾患の後遺症などから言語的コミュニケーションに支障をきたした場合、介助者や他の入居者ともコミュニケーションの機会が減る。それにより高齢者は孤独な状態に置かれ、苛立ちなどの不快な感情を鬱積させるような状態につながる可能性も大きい。このようにコミュニケーション上の問題が大きくなると、施設入所高齢者の感情は不安定になり、時には混乱し、これまで自立していた日常生活行動が遂行できなくなりその結果、生活の質 (Quality of Life) の低下につながる。そこで施設入居高齢者の限られた空間における生活を豊かにする福祉的活動とし

\* 連絡先 : nkawamura@oita-u.ac.jp

て AAT や AAA はその役割を期待されている。

本研究では、普段会話の少ない認知症高齢者にとって動物をかこむことが、高齢者の発話や内容に与える影響について、またその場におけるボランティアの機能について探究しようと試みた。なぜなら、実際に認知症高齢者が多く居住する施設において、認知機能の障害が進むにつれて高齢者同士の会話は実に少なくなる。それにより人との交流やつながりの機会は減り、それは孤独な環境につながるからである。本研究では、動物を介在させる場についてこれまでの対象者のみに注目した自然科学的方法による効果の検証とは異なり、ボランティアの介入による対象者の反応を分析することから捉えようとした。

施設入所高齢者に対する動物介在療法 (AAT) / 動物介在活動 (AAA) の学術的背景

動物が人に及ぼす影響について、ペット動物に限らず訪問動物に対しても、その効果については生理的・心理社会的側面から効果が検証されてきた (Katcher 1981, Odendaal and Meintjies 2003)。そして、AAT/AAA の参加により、笑いや発話の回数が増加するという社会的行動の促進効果についても Robb ら (1980) の研究以降多くの研究者が指摘している (金森他 2001, Edwards and Beck 2002, McCabe *et al* 2002, 真野他 2003)。AAT/AAA は、長期間療養施設で生活している高齢者に対して社会的行動や言語的な相互交流を促進させ、興奮した行動や孤独、うつや不安を減らすこと、さらに発言、表情、周囲の人や犬への関心が増すことについても報告されており (Banks and Banks 2002, Marx *et al* 2008, Motomura *et al* 2004, Roux and Kemp 2009, 太湯他 2008)、施設入所高齢者の生活を豊かにすることにつながると指摘されてきた (Sellers 2005, Steed and Smith 2003)。

その一方で、AAA/AAT において人と動物とがどのように出会い交流するのか、また、そこに携わる人が存在することの意義については、充分議論されてこなかったように見える。実際の AAA/AAT の場では必ず動物とともに、ハンドラーと呼ばれる動物の飼い主であるボランティアがコミュニケーションに参加する。そして、その場にはケアスタッフなどの医療者も介入する。つまり動物を囲み複数の人がかわりあうことによって、この場には単なる動物と高齢者とが物理的に接点をもつだけの機会ではなく、さまざまなコミュニケーションが現われる。視点を変えると、AAA/AAT の場では、高齢者個人が動物と出会う場でだけではなく、人 (高齢者) と人 (高齢者やボランティア、職員) との間に動物が登場するともいえる。直接的な動物との触れ合いと共に、人と人あるいは人

と動物との間に言語的・非言語的なやりとりが発生し、そのやりとりを通じて動物に対する感情が自分以外の他者との間に共有され、響きあうような関係が広がる場であるといえる。これについては参加した人が体験していることであるが、この場がどのように成り立つのかについて議論は少ない。

そこで本研究においては、この場を理解する第一段階として認知症高齢者の発話およびボランティアの発話内容を具体的に調査することによって、将来的な AAT の実施につなげるための AAA という場のコミュニケーションを解明する手がかりを見つけようとした。

## II. 本研究の目的

本研究の目的は、AAA に参加した認知症高齢者の反応について、その発話の数や内容を詳細に分析・分類し、高齢者に対する AAA の場の特徴や発話の特徴を明らかにすることにより、認知症高齢者に対する AAT の可能性を検討することとした。

## III. 研究の方法

### 1. 本研究における動物介在活動 (AAA) の実施

動物が介在する活動または治療に関して、治療の一環として医療者の介入のもとに実施され評価が行われる活動は AAT と表わされる。それに対して、活動に治療的目標を定めずことなく定期的あるいは不定期に実施される活動は AAA と表わされる (Pet Partners 2013, 養老他 2013)。

本研究の場合は、はじめに施設の作業療法士から AAT 実施の希望があり、施設で実施可能な AAT を立案するという姿勢でこの取り組みを研究と共に開始した。したがって、この段階においては上記の定義から、作業療法の一部として実施された AAA の介入研究といえる。

#### 1) 調査期間および場所

平成 18 年 9 月から平成 19 年 2 月まで、A 市内で協力の得られた精神科病院の認知症治療病棟 1 か所で本研究を実施した。2 週間に 1 度、午後 13:30-15:00 の作業療法の時間帯に組み込み、合計 6 回実施した。患者らが食事やレクリエーションなどをする病棟内の 40 畳ほどのデイルームを会場とした。

#### 2) AAA の設定

(1) 調査開始前の準備：病院の看護・介護職員とボランティアと作業療法士、研究者は、事前に数回打ち合わせの機会を持ち、実際の患者の反応や影響、特に拒絶等の有無について確認した。事前に 2 回ほど犬を連れ訪問活動を実施した。その後、職員から研究の対象者の推薦をうけ、

対象者の席の配置についても相談して決定した。対象者の選定に関しては、家族や本人から動物が好きであるという情報等得られ、さらに施設の医療者が推薦する方を基準として決定した。

- (2) 会場の設定：病棟の中央にある40畳ほどのデイルームに、3つのテーブル（約1.5m×1.2m）を用意し、その上にビニールマット、クッションマットを敷いた。犬が充分に人に関心が持てるように1頭ずつテーブルに配置した。また犬を抱きやすく、犬の顔がよく見えるように高さを考え、犬をテーブルに乗せ、テーブルの犬を対象者やスタッフでかこむという状況になった。本研究では3つのテーブルのうち最も端のテーブルに対象者を配置し席を固定した。AAAは病棟の作業療法の一部の活動でもあったため、残りの2つのテーブルは犬好きな方が自由にふれ合うことのできる場所として確保し、犬とふれ合う内容には差が生じないように配慮した。施設職員は変則的な勤務体制から毎回交代した。
- (3) 内容：AAA全体の所要時間は40分～50分とし、以下の3つの部分で構成した。1) お互いの挨拶や日常会話（約8～10分）、2) 犬との直接交流（テーブル上で、犬を抱く、ゲームをする、フードを与えるなどの交流（約30分）、3) 感想等を述べ合う時間（約8～10分）。犬との直接交流時間（約30分）以外は、対象者から見えないところにケージを置き、犬を中に入れた。
- (4) 訪問動物（犬）：体重3～4kgの小型犬3頭（パピヨン1頭、ミニチュアダックスフント1頭、トイプードル1頭、すべて雌1歳以上）とし、6回の訪問の間は変更しなかった。対象者の座るテーブルの犬は、トイプードル（仮名：プー、雌、1歳）とした。本研究で使用した3頭の犬は獣医師が飼っており、動物の健康管理及び衛生管理やしつけに関して充分行い、訪問日の直前に犬のシャンプーや爪切りなどを実施していた。この3頭は普段から共に生活している。訪問場所での動物同士のストレス等を考慮してこの3頭のみを使用した。本研究で協力を得たハンドラーと犬は、本研究に協力する前数年間にわたり月2回の頻度で特別養護老人ホームや老健施設などの高齢者施設での訪問活動ボランティアを経験していた。プーと本研究のボランティアは半年以上の施設訪問経験を有していた。

- (5) 関係スタッフ：病棟担当の作業療法士1名（女性）、病棟の看護・介護職員3名～4名（毎回変更となる）、犬の飼主でもあるボランティア（ヘルパー資格を持ち認知症ケアについて当時は勉強中であり現在は認知症ケア専門士）1名、大学生ボランティア数名（ボランティアは全て犬の訪問活動の経験者）。筆者は看護師の資格を有し、他の施設においてもAAA参加の経験もあったため、全体の雰囲気が調査目的の実験的な印象を帯びた活動にならないよう配慮し作業療法の運営を補助した。セッションの間は、対象者が位置するテーブルのみではなく各テーブルをまわり動物と参加者の交流をサポートした。具体的には、動物と関りたいと思いながらも手を伸ばすことをためらっていたり、遠慮などによって犬に近寄れずにいる方を誘導するなどボランティアの補助を行った。
- (6) 終了後：AAA終了後は、院内の部屋に担当の作業療法士、可能な場合は病棟の看護スタッフ、ボランティア、筆者が集まりミーティングを実施した。感想や情報交換、次回の予定について確認を行った。
- (7) 活動の安全管理：本研究におけるAAAは、病院の作業療法プログラムとして病院の責任のもと実施された。さらにボランティアと研究者は全員がボランティア保険に加入した。

## 2. 対象者

対象者は職員からの推薦を得て決定した。本人およびご家族から研究協力を同意を得られたAAAの参加者4名（A子、B男、C子、D子：全て仮名）を対象者とした。施設職員との打ち合わせの中で、次の項目を対象者の基準とした。「犬が嫌いではないこと。」「健康状態・精神状態から6回のセッションに参加が可能であること。」「AAAの時間内に隣に他者がいても参加にさしつかえないこと。」

## 3. 倫理的な配慮

研究者が研究当時所属した札幌市立大学の倫理委員会の承認（2006年11月）を受けて後、研究を実施した。研究協力施設の病院長に研究の趣旨を説明し承諾を得るとともに協力を得た。調査対象者からの調査協力に対しては、研究の趣旨および個人情報の取り扱い、調査協力の自由について、文書・口頭で説明し、本人およびご家族より調査協力への承諾の署名を頂き、その方を対象者とした。AAAの時間内においては、対象者の気分や体調は常に配慮し、不快なものにならないよう職員と共に配慮した。当日の対象者本人の気分や体調、意思についても尊重した。

さらに、本研究に協力を得たボランティアは犬の飼

主でもあり、また AAA の経験者である。犬の表情やシグナルを常に読み取ることが可能であることから、対象者と犬との交流を支援しながらも犬に対しては、ストレスサインを活動中も確認し、過度な負担がかからないように注意した。

4. 動物介在活動 (AAA) における犬をかこむ場の対象者の観察と分析の方法

対象者 4 名すべての AAA (1 回約 40 分 - 50 分間の全 6 回) 参加の様子をビデオカメラに収録した。対象者が着席するテーブルを挟むようにビデオカメラ (Sony HDR HD3) を設定した。

4 名の対象者それぞれの年齢、性別、診断名、日常生活活動能力および精神機能については、病棟担当の作業療法士および看護師が、AAA 開始前の状態を査定した。

本研究では対象者の参加の様子をすべてビデオテープに記録し、対象者、犬、ボランティアおよび職員の発話および行動を書き起こしてトランスクリプトを作成した。実施した AAA の 6 回分をデータとして分析した。

対象者の発話の分析については、対象者の中でも A 子さんは比較的言語表現がみうけられたため、A 子さんの心の動きについて読み取ることが可能であると考えられた。そこで A 子さんの直接的な犬との交流の中でみられる犬に対する発話について注目することにより、A 子さんの心の動きが汲み取れると考え、A 子さんの発話を分類した。まずは対象者 4 名の参加の様子について、表 1 に示す。

藤崎 (2002) は、飼い主がペット動物に「心」を付与することによってペットの心を理解し、また人とペット動物とのコミュニケーションを分析することから人はペット動物に対して「感情」を主とする「心」の読み取りをしていることを述べている。そこでこの分類にあたり、藤崎 (2002) のペット動物に対する飼

い主の対動物発話の分類を参考にした。単語レベルの発話はそれぞれを 1 発話とし、繰り返しのある場合は、音の区切れで区切って全体を 1 発話とした。文章レベルの発話は一文を 1 発話として数えた。

A 子さんの犬に関する発話をすべて抽出すると、その言葉の特徴から表 2 に示すようにいくつかのカテゴリーに分類することができた。そして、犬が存在しない場においても会話の発展を常に支え、みちびいていたのがボランティアであったことからボランティアの発話に関しても同様に分類した。

発話の分類は、文脈からの流れを重視して行った。実際の AAA の場面は、犬と A 子さんが 1 対 1 になる場面は非常に少ないので誰に向けた発話かを汲み取り難いものも多かった。例えば、「抱っこ大好きなの」という発話の場合、ボランティアが犬の直接的代弁をしたように理解 (B1) できる一方で、犬が主体として「思考」していることを犬に帰属させ叙述している発話 (C1) とも理解できる。そのため、カテゴリーの分類においては、筆者と高齢者のケア経験を 5 年以上有する看護師 1 名の 2 名が独立にビデオデータを繰り返し見ながら、トランスクリプトを読み、さらにその時の場面の流れを判断してもらい不一致部分は協議の上決定した。カテゴリーの一致率は 83.74% であった。カテゴリー分類においての優先順位は A, B, C, D とした。

カテゴリーは「犬に向けた直接的話しかけ (A)」「犬の気持ちの代弁 (B)」、「犬の心的状態・思考に関する発話 (C)」、「犬の行動や状態に関する発話 (D)」と大きく 4 つとし、それぞれのカテゴリーは、さらにサブカテゴリーに分類した。

「犬に向けた直接的話しかけ (A)」の中でも、犬に「……ねー」など心理的な理解を汲み取り犬に対して直接発言しているときみることができるものは、「犬に対して直接共感的に話しかけているもの (A1)」と

表 1 AAA における対象者の参加の様子

対象者	AAA 参加の様子
A 子氏	A 子さんは、物静かで声も比較的小さく、微笑むなどの表情の変化はあったが、犬に対して大きなアクションはなかった。声も小さいせいか、犬との交流を見るからに楽しんでいるという印象は受けなかったが、会には無理強いしなくとも 6 回すべてに参加した。
B 男氏	B 男さんは、以前コッカースパニエル (犬) を家の中で飼ったことがあるということだった。ボランティアの連れてくる犬を笑顔で見つめた。ボランティアやスタッフの言葉かけに対してはおうむ返し返答が多かった。犬に対して、はきはきとコマンドを出した。犬に長い間「マテ」をさせ楽しんだが、「マテ」をさせたまま、「ヨシ」の言葉を忘れることがあった。
C 子氏	C 子さんは、常にテーブルの上に敷いてある絨毯用のマットの継ぎ目を両手でもぞもぞ触れていた。前方をぼんやり見ており、視線は誰とも合わなかった。話しかけてもほとんど発話はみられなかった。1 回目には、犬を目で追う様子があったが、回を重ねると介助によって犬を抱き、表情が柔らかくなる様子もあった。
D 子氏	D 子さんは、犬を飼っていた経験もち犬が好きであった。毎回犬がケージから出されるとパッと笑顔になった。犬に「マテ」や「オスワリ」をさせるが、長い間待たせるのはかわいそうであると話し、直ぐに「ヨシ」といった。犬に自ら手を伸ばして抱いたり、撫でたりした。

した。これに対して、犬に対して指示・質問・評価という心理的な理解の汲み取りが不可能なものは、「犬の心的状態を想定しているとは言えない発話 (A2)」に分類した。

「犬の気持ちの代弁 (B)」は、さらに「犬になりきって発話していると読み取れる犬の直接的代弁 (B1)」と「犬の代理的代弁 (B2)」に分類した。直接的代弁 (B1) は、自身が犬の身体の位置にわが身を重ね、そこで犬の身体を生きるという事態を言おうと読み取ることができると解釈し、これは鯨岡 (1997; 2006) が説明している「成り込み」の状態と判断した。また、犬の代理的代弁 (B2) は、「犬は……と言っている」と自分の立場を維持しながらも犬の心理的理解について代弁しているものとした。

「犬の心的状態・思考に関する発話 (C)」は、「主体として「感じ」「知覚」「思考」していることを犬に帰属させ叙述している発話 (C1)」と「犬の心的状態を暗黙裡に想定し、自身の立場から発言しているもの (C2)」に分類した。主体として「感じ」「知覚」「思考」していることを犬に帰属させ叙述している発話 (C1) とは、犬が見る・聞く・思う・考える等犬が知覚しているかのように叙述している発話である。そして、犬の心的状態を暗黙裡に想定し、自身の立場から発話しているもの (C2) は、犬を擬人化している前提で犬の心的状態を想定し、それに対して自分の立場を維持しながら共感や同情を述べたものである。

最後に「犬の行動や状態に関する叙述 (D)」は、犬の「食べた」、「歩いた」などの行動をそのまま言葉

に表わした発話とした。

さらにそれらの発話を A1・B1・B2・C1・C2 については心的状態を付与していると考えられる発話とみなし、A2 および D については心的状態を付与しない発話とみなした。

#### IV. 研究の結果および考察

##### 1. 対象者の特徴

対象者それぞれの年齢、性別、診断名、日常生活活動能力および精神機能など対象者の特徴について示す (表 3)。

日常生活活動能力および精神機能の評価については、評価尺度 N-ADL・MN スケール (小林他 1988)、MENFIS (Mental Function Impairment Scale) (本間他 1991) に基づき施設職員と作業療法士が評価したものから情報を得た。さらに、AAA で収録したビデオテープにより観察された情報と AAA 前後に施設職員やボランティアから得られた情報、さらに筆者が AAA の場で観察した情報を基にして客観的に記述した。

A 子さんは、若い頃に犬好きの夫が飼いはじめた犬の世話を任せられたという経験があった。そのせいか当時から現在に至るまで犬は特別好きというわけではないと話した。後に分かったことであるが、特に犬が飛びかかってくるのは苦手であるということだった。A 子さんはボランティアや職員に対して、いつも気遣いがみられ、「大変でしょう？」とねぎらいの声をかけていた。

表 2 AAA 全 6 回の A 子さんとボランティアの犬に関する発話の分類

カテゴリー		サブカテゴリー		例	全 6 回の発話回数(回)	
					A 子さん	ボランティア
A	犬に向けた直接的話しかけ	A1	犬に対して直接共感的に話しかけているもの	「おいしそうだね」	6	10
		A2	犬の心的状態を想定しているとは言えない発話: 質問・助言・評価など	「待て」「コンニチハは?」「お利口だねー」	47	219
B	犬の気持ちの代弁	B1	犬になりきって発話していると読み取れる犬の直接的代弁: 「成り込み」	「早くれないかなー」「頂戴, 頂戴」「さようならー」	1	80
		B2	犬の代理的代弁: 代理的代弁を一部として含む発話もこれに入れる「…だって」	「遊びたい, 遊びたいって」	2	59
C	犬の心的状態・思考に関する発話	C1	主体として「感じ」「知覚」「思考」していることを犬に帰属させ叙述している発話	「女の子だからちよっとおしやれも好きなのね」「抱かれるの大好きなの」「おなかすいてるんだね」	16	116
		C2	犬の心的状態を暗黙裡に想定し、自身の立場から発話しているもの: 犬を擬人化した発話	「かわいそうだね」「甘えんぼちゃんだね」	23	52
D	犬の行動や状態に関する発話	D	犬の行動や状態を叙述している発話: 「見る, 聞く, 匂いをかぐ」などの知覚を含む行動は「心的状態」に入れ D ではなく基本的に C に含めることとする	「おとなしい…」「一生懸命食べる」	90	299

B 男さんは、犬を飼育していた経験を持っており、犬が大好きである。毎回犬に「いい子だねー」など目を細めて話しかけ、指示を出しそれに従う犬を褒めて、終始笑顔で参加した。

C 子さんは、疾患から言語的コミュニケーションがかなり困難であった。当初、施設職員は C 子さんが AAA の時間に着席し続けられるかさえ心配していた。そのため、AAA の時間は施設職員が C 子さんの隣に座って参加し、毎回時間内は着席しつづけ参加できていた。

D 子さんは犬好きで、犬が出てくると必ずすぐに笑顔になった。「かわいいね」と何度も発言した。ボランティアが話しかけるとほとんどの質問に答えた。他の対象者が犬と関わる様子をみながら頷くなど、場が盛り上がると笑顔になった。

2. 犬が登場しない場における対象者の会話の特徴

ここでは AAA/AAT という場において動物を媒介にした会話の広がりやどの程度見られたかについて検討する。対象者は毎回同じメンバーであったため、回を重ねるごとにお互いを徐々に認識していった。対象者全員が認知症の診断を受けてはいたが、毎回 AAA の目的で集まっていることは各々認識していたようにみえた。

実際に犬が導入される前の会話の場において、対象者同士の自発的な会話がどのようになされているかを数え、その数から会話の特徴や傾向を捉えようとした。すると、犬が導入されることを予測している場であるにもかかわらず、会話そのものがほとんど見られなかった。この場においていかに対象者同士の会話がこの AAA では見られなかったのかということについて

表 3 AAA における対象者の特徴

対象者 (年齢・性別)	診断名	日常生活活動能力および精神機能 (N-ADL・MN スケール・MENFIS に従い記述)
A 子 (88 歳・女性)	老年期認知症 幻覚妄想状態	身の回りのこと(移動・起座, 食事, 整容, 排泄)はほぼ自立。交流, コミュニケーションにやや積極性の低下がみられる。複雑な会話は困難。失見当識はかなり障害がある。物事への興味や周囲への関心をあまり示さない。感情表現は豊かとはいえないまでも表現がみられ, 感情をコントロールできない場面もある。
B 男 (79 歳・男性)	老人性認知症 幻覚妄想状態	車椅子を使用しており, 更衣, 食事, 排泄などに介助が必要であり整容や身辺整理は介助。記憶や見当識, 判断に障害があり, 簡単な会話は可能であるがつつまの合わないことがある。あまり自発的な行動や交流はみられない。
C 子 (73 歳・女性)	アルツハイマー型認知症 幻覚妄想状態	歩行や食事はほぼ自立しているが, その他の身の回りの日常生活動作には介助が必要である。記憶・記銘・見当識に大きく障害があり, 周囲に多少の関心があるが, ぼんやり過ごすことが多い。簡単なことは理解可能で短く返答するが, つじつまが合わなく, 状況にあっていないこともある。
D 子 (84 歳・女性)	アルツハイマー型認知症	日常生活動作はほぼ自立している。整容・身辺整理は介助が必要。コミュニケーションはほぼ正常だが複雑な会話は困難。自発的にはほとんど行動しなく, やや気力や生気がない。感情表現は少ない。

表 4 犬が登場する前 (犬が存在しない場) における対象者の発話の数: 前半 (1-3 回) 後半 (4-6 回) の合計

対象者	自発的発話 (他者から応えを要求されていない場合に発した発言) (件)		受動的発話 (他者から応えを要求されそれに応じて発していると読み取れた発言) (件)		他の対象者に向けた発話 (件)		全発話 (件)		備考 前半 1-3 回 後半 4-6 回
	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	
A 子氏	5	11	50	27	0	1*a	55	39	*a) 5 回目 B 男さんに「(お手) したよね」と言う
B 男氏	0	0	84*b	67*b	0	0	84*b	67*b	*b) 「はい」「ええ」「そうですか」という発言が圧倒的に多い
C 子氏	0	0	8*c	0	0	0	8*c	0	*c) 文章にならなく単語のみを発する発言
D 子氏	0	3*d	26	33	0	0	26	36	*d) 獅子舞の話になり自発的に話す

て、表4に示す。

表4には、毎回のAAAで席につき、その後犬が導入されるまでの8～10分間の会話1回から6回までのその時間内にみられた対象者の発話の数を示した。会話はすべてボランティアが進めた。まずはボランティアが対象者それぞれに挨拶をして対象者はそれに応えるという形式をとった。対象者の自発的発話そのものはほとんどみられず、他の対象者に向けた発話についてもみられなかったことがわかる。つまり会話の発展が認められなかったことが読み取れる。対象者は、ボランティアの会話の投げかけに応えるのみであり、それ以外は前を向いたり遠くを眺めるように過ごしていた。このような状況なのでB男さんに至っては目を閉じてしまうこともあり、この時間内には沈黙も多かった。しかしながらこの状況は、認知症の高齢者が多く居住する施設の日常においては例外的なものではなく、沈黙が支配するといっても良いこの状況は恒常的に見受けられることである。

すなわち、何らかの精神機能の障害をもつ認知症高齢者が、犬というトピックを提示され集まったということだけでは、会話が発展しにくく、ボランティアが会話を導いたとしてもその会話の発展性については限界があるともいえる。

次に、このような会話が少ない場においても、自発的発話はA子さんとD子さんにみられたことについて考える。

前半の全173発話中自発的発話は5、後半も全142発話中自発的発話は14（そのうちD子さんの3発話を除いてはすべてA子さん）であった。D子さんの後半の回にみられた3回の発話は、施設の季節行事で獅子舞があり、その内容についてボランティアに説明をしたものであった。A子さんを除く3名からは自発的な発話がほとんどみられなかったといっていだらう。

A子さんの場合は、初回の自発的発話の内容は、ボランティアと職員がC子さんに声を掛けたところ反応が得られなかったので、ボランティアが「聞こえなかったかな……」とつぶやいた後に、「奥さん、(Cさんに)あんまり言ってもだめだから(反応は返ってこないから)」とボランティアをねぎらう発話であった。3回目にはボランティアに向けて、「(C子さんの精神機能について)気の毒にね、こんなになっちゃって。」「気の毒だよ、こんななってるね。」と話している。また、他のテーブルの人を指さして「あっちの人、行ったことないから知らない。」という発話もあった。

6回目には隣に着席した職員に対して、「あの〇〇さん、今日やるの？(AAAを担当するの?)」「ここに座るの?」「あら、それだったら無理してもうれし

いわ(無理をして参加してくれているとしてもうれしい)」と話しかける内容であり、この場ではA子さんが職員よりも会話をリードしていることがわかる。毎回職員の担当者が交代することも理解しているからかA子さんからは、自分の方が多く参加している余裕のようなものさえ伺える。そしてC子さんへのねぎらいの言葉についても、初回はC子さんを排除するような声掛けのようにも捉えられるのだが、次第にC子さんを関わりの対象として捉えていることが読み取れる。

犬がいない場においてもA子さんのこの場の認識を徐々に変化させるような何かしらの交流が、犬をかこむ場にはあると考えられる。それでは、その犬をかこむ場における発話の特徴について捉えていく。

### 3. A子さんと動物(犬)とのやりとりに関する発話の分類と特徴

表2に示した分析に従い、1～6回の各回にみられたA子さんとボランティアの発話を心的状態の付与とそうでないものに分類した。表5に分析のトランスクリプトの一部を示す。

表5に示したのは、AAAの1回目に犬が導入された場面である。この後ボランティアが毎回犬を紹介してセッションが始まり、犬の状況や出来事を紹介する会話が続く。

分類したA子さんとボランティアの発話の回数については、表6に示す。

A子さんとボランティア共に全6回を通して、心的状態を付与した発話よりも付与しない発話が多くなっている。ボランティアはまず犬の紹介をし、芸を見せて対象者を楽しませるように場を盛り上げる役割をとっていた。また犬に指示を出すと犬が従うところも対象者に見せていたため、A2のようにコマンドを出す発話は多くなっている。A子さんに関して、ボランティアに促されて犬にコマンドを与えるという流れになっているため、「マテ」や「ヨシ」というA2に分類される発話が多かった。

A子さんの犬の心的状態を付与した発話の内容としては、「食べたそうですよ」「やることやんなきゃならないからねー(犬がボランティアに支持されている様子をみながら)」「甘えん坊ちゃんだね」「眠いんだね」、「人見しないね(人見知りしないね)」「あー、おなか一杯になったから」、「いやいや、もうお母さんが隣にいたらね、もうきかないからね、いうこと」など犬が置かれている状況について推察しそれに共感するような表現がみられた。

藤崎の研究からも、犬の飼い主は命令と評価に関する発話が多くなることが明らかになっており、命令して犬がそれに応えて、またそれを評価するという循環

表5 AAA 1回目の会話の例 - 犬が導入された場面

<p>場面: AAA1 回目</p> <p>プーがケージから出される。ボランティアがプーの片手を持ち上げ、手を振るように参加者に挨拶をさせる。A子さんは表情を変えずに犬の動きを目で追う。</p>	
ボランティア	<p>「この間もきましたよね、お会いになりましたよね。」(対象者全員に言う。)</p> <p>「いま、D子さんも、皆自己紹介したからね、プーちゃんもちゃんと自己紹介しなきゃだめよー」【A2】(プーに言う。)</p> <p>「ハイ、プーちゃん、お座り、おすわりよーお座り。ちゃんとお座りして」【A2】(プーを捕まえ、対象者全員にプーの顔を向け、ボランティアはプーの後ろに立つ。プーのお尻を押し下げ、オスワリをさせる。)</p> <p>「はい、プーでーす」【B1】(プーの右手をもち上げ、挨拶をしているかのようにみせる。)</p> <p>「プーでーす。よろしくお願いまーす」【B1】(A子さんに言う。)</p> <p>「よろしくお願いまーす」【B1】(B男さんにプーの体を向けて言う。)</p>
B男さん	<p>「かわいいね」と言い、笑顔で手をたたく。</p>
ボランティア	<p>「C子さん、プーでーす。よろしくー」【B1】とプーの手を上げて言う。</p> <p>「D子さんも、よろしくお願います。プーちゃんてーす」【B1】とプーの手を上げて言う。</p> <p>「あくびしてましたよ【D】、寝てたのかしら、ねえ【D】」(対象者全員に対してプーの様子を話す。)</p>
<p>他の対象者が笑顔で犬にお辞儀をしたりするなか、A子さんは自分の前で挨拶をさせられるプーを、表情を変えずに見る。その後も、A子さんは他の参加者にプーが抱かれる様子を、表情を変えずに見続ける。</p>	

表6 AAA 1～6回における、A子さんとボランティアの「心的状態を付与した発話」と「心的状態を付与しない発話」の回数および、ボランティアの発話に対するA子さんの発話の割合

AAA	心的状態を付与しない発言の回数(回) (A2, D)			心的状態を付与した発言の回数(回) (A1, B1, B2, C1, C2)		
	A子さん	ボランティア	ボランティアの発話に対するA子さんの発話の割合	A子さん	ボランティア	ボランティアの発話に対するA子さんの発話の割合
1回目	16	63	0.25	11	58	0.19
2回目	34	121	0.28	18	71	0.25
3回目	26	105	0.25	6	73	0.08
4回目	11	75	0.15	2	37	0.05
5回目	19	99	0.19	1	64	0.02
6回目	31	55	0.56	10	14	0.71

するやりとりが多いことについて指摘されている。本研究の場合においてもA2の指示するような発話は、さきに誘導するボランティアがあって、その促しに応えA子さんが実施する流れになっているために両者において共に多い発話となった。さらに、Dに分類される行動の描写に関する発話もボランティア・A子さん共に多い。会話が起こらず沈黙が支配する輪の中で、犬をトピックにボランティアが会話の場を生み出そうと犬の状態を少しでも詳しく説明しようというように奮闘している状況がここから推察できる。

また、各回ごとの発話について、表6からボランティアの発話に対するA子さんの発話比率は、心的

状態を付与しない発言の場合においてAAA1～5回目では0.15～0.28となるが、6回目には0.56と大きくなった。さらに心的状態を付与した発言についても6回目は0.71と他の回よりも大きく、6回目には自発的発話が多かったことがわかる。ボランティアは常に会話を一歩先へと導くように犬を紹介しながら会話を進め、それにつられるようにA子さんの応答についても増減し、6回目には自発的な発話も増えていくことが読み取れる。また、6回目に関しては、ボランティアの発話は5回目よりもさらに減っている一方で、A子さんは再び発話の回数が増えている。これについて、これまで常に犬の心的状態を伝え続けてきたボラ

ンティアが、この頃には A 子さんだけでなく他の対象者も犬の情報や特徴、性格について捉えてきており、犬の心的状態についてもボランティアが先に先にと発話を導く必要性が減ったと考えることもできる。

#### 4. 発話の分類から読みとく認知症高齢者に対する AAT の可能性

認知症病棟に入院し重症度が異なる 4 名の対象者が集まるテーブルには、自然に始まる会話は全くなかった。そこに犬が登場しても会話が発生し発展する様子はみられず、ボランティアからのみ会話が発信された。この「場」は活気なく堅苦しい空気で覆われていた。この非常に落ち着いているとも言い表すことのできる状況は認知症病棟等ではよくみられる光景である。認知症高齢者にとって会話を広げたり推し進めるだけのきっかけやケアがその場で十分に発揮されていない場合にも同じような状況がおこる。ここでは、一人一人の高齢者との会話は可能であるため、この場の堅苦しくもありただ静かになりがちな環境を打ち破り、いかにして生活歴の豊富な高齢者が面白いと感じ遊び心が刺激されるような場に変えられるのかということとは常に課題とされている。

今回はこのような静かな環境に、普段病棟では接する機会がない犬とボランティアが導入された。はじめは犬を見ながらもやや身を引き、距離をおいた姿勢で参加していた A 子さんも徐々に犬とボランティアの創造する世界に巻き込まれ、A 子さんが犬の心を読み取り表現するようになった。2 回目以降の犬が登場しない場においてでさえ、A 子さんは C 子さんへの同情を示し、また自らが交流する相手として C 子さんを認識するという変化もみられた。これはこの場において A 子さんの C 子さんへ向かう心が大きく動いていることの表れだと考えてよいだろう。それには、ボランティアがたくさんの犬の心を読み取る働きかけをし、犬の心を推察する思考過程に A 子さんが巻き込まれていった過程が大きく影響しているように見える。一般的な活動プログラムでは他者の気持ちを推察するということを求められるものはそれほど多くない。しかしながら AAA/AAT においては、まずは動物を相手にコミュニケーションを図る。小型犬は呼ぶとこっちへ寄って来たり、指示に従ったり、眠たそうに目をこすったり休んだりするしぐさを示す。それを見ながら参加者は、犬の心を読みとろうとし、またその犬が表現したいことを代わって代弁するという補完的コミュニケーションが自然と沸き起こっているように考えられる。その一匹の犬を中心にして、ケアする心は同じ気持ちをもってその場に居合わせる他の参加者とも共有されやすいといえるだろう。D 子さんの自発的発話が後半の回になり現れたことや、A 子さんが

しだいに C 子さんに仲間という認識を得ていったことはこの補完的コミュニケーションの共有の兆しであると考えられる。

さらに、今回は A 子さんのみの発話に焦点を当てているが、他の参加者にとってはどのような場になっているのだろう。表 3 に示されているように B 男さんはおうむ返しの発話が初めから多く、笑顔で過ごしていたが、心の動きについて読み取ることが困難であった。C 子さんは質問に答えることはほとんどなく、表情の変化は乏しく発言としては単語を発するのみであったが、犬を抱くと表情は変化しないものの力加減もやさしく上手に抱き、犬も C 子さんに身を任せていた。D 子さんは A 子さんほどに発話は多くなく、ボランティアの投げかけに対して応える会話が少なかった。このように A 子さん以外の対象者はそれぞれにこの場で犬との交流を楽しんでいたともいえるが、捉え方によってはこれら的高齢者は犬が好きなのだ、という理解を超えないようでもある。しかし、どのように楽しんでいるか、いかに効果的である場なのかは、リアクションの大きさでは測れない。まして精神機能に障害をもつ高齢者であればそれはなおさら確かなことである。A 子さんでさえ、参加は無理強くなっていないかとスタッフが懸念するほど他者からは捉えにくい楽しみ方の表現をしていた。一見小さな感情表現方法を示す参加者の楽しみをそばに付き添うスタッフがより確かなものにしていく援助が必要であると考えられる。この医療者の役割については今後評価の仕方とともに探究される必要があるだろう。動物を活用する AAT の場合には、施設の日常にはない動物を用いることによる参加者の一時の高揚感について充分予測できる。しかしながら、この高揚感の継続やこの高揚感が参加者個人にもたらす治療的意味を考慮していく必要がある。今回の研究では、A 子さん以外の対象者にとってのこの場の意味を明確にすることができなかった。また反応を捉える視点やツールを見出す努力が必要であり、これはこの場に支援する医療者の課題の一つであると考えられる。

藤崎 (2000, 2002) は人がペット動物に対し、プリミティブな感情モードで「心」の読み取りをしていることについて指摘し、それは母子のコミュニケーションに似ていると述べている。今回も A 子さんからは犬の気持ちを補完するコミュニケーションがみられた。そしてボランティアがそれに先立ちたくさんの情報を与えつつ心の読み取りを示している影響についても明らかになった。高齢者は熟達したコミュニケーションスキルをすでに獲得して実践してきたという背景がある。しかしながら、認知症高齢者は精神機能に障害があることによってそのスキルを容易にかつ十分

には発揮しにくい状況にもある。本研究の対象者のように施設や病院で生活を送る高齢者は、生活に何らかのケアを必要としている。動物をかこむという生き物と対峙する場合は、きっかけが何もなければ発話が全く見られないような環境からも、意図しなくても動物の心を推察してしまうという情動や感情を揺れ動かすものであり、これは情動のリハビリテーションである。すなわち医療者がより介入できる部分であると考えられることもできる。高齢者一人ひとりの障害の特徴を理解しながら、動物をかこみ会話が進展し、さらにその会話が仲間へと発展するよう医療者が働きかけることが重要である。またさらに、高齢者個人の能力や関心をより発揮してもらい、障害をもちながらも情動や感情面において高齢者が豊かな世界を創ることに共に参加していくことが必要であると考えられた。

## VI. 結論と今後の課題

本研究において、AAAに参加した認知症高齢者の発話の数や内容について分析・分類した結果として、犬が登場しない場においてほとんど交わされなかった言語的な交流は、犬をかこむ場において認知症高齢者の自発的な発話が増えていることが明らかになった。そしてその発話はボランティアの膨大な犬についての描写や心的状態を付与する発話が先にあり、ボランティアに同調するように認知症高齢者の発話の数が増幅していることから、ボランティアが発話を導き、犬の心を読み取ることにについても導いていることについて示唆された。さらに、この場において犬を媒介にして他者に関心が向けられることを通して、他者が置かれている状況に対する感情が動くようすも求められたことから、他者と繋がりが持てる場であったことがいえる。

施設の生活は単調であることや刺激の少なさについて指摘されているが、入所高齢者同士が相手の理解に心を動かすようなつながりが持てるということは、小さな出来事のように見えるが認知症高齢者にとっては大きな変化でもある。動物をかこむことにより、その向こう側に他者が見え、つながっていくことはAAA/AATの基本的でもあり重要な効果であるといえる。本研究により動物を媒介にした人とのつながりの確かな可能性が見いだせた。つまり、ボランティアの動物への働きかけや言葉かけがモデルとなり、ボランティアの認知症高齢者への働きかけや言葉かけが刺激となって、認知症高齢者がボランティアや動物に対する応答性を増やしていく可能性や、また同じ場を共有している仲間への感受性を育てていく可能性である。このような可能性を今後さらに詳細に探究していく必要があるだろう。そして今回はA子さん以外の対象者

の変化については発話ではとらえにくかったため、十分な分析ができなかった。精神機能や認知機能、コミュニケーション能力などを踏まえて変化や個性を捉え、場の評価をしていく課題が残っている。さらに、動物をつなぐボランティアの具体的役割についても解明される必要がある。この場に発生するコミュニケーションのプロセスについて、今後より詳細な観察と分析によって深く捉えていくことが求められている。

## おわりに

本論文では、動物とその動物を支えるボランティアが高齢者の心を動かす会話を進めるAAAの場は、まさに自発的な会話の少ない環境におけるコミュニケーションの発動の場であるということについて明らかになった。

認知症の病態や周辺症状のあらわれ方は多様である。精神機能が重度になればなるほど、高齢者の発話も少なくなり個性や能力は見えにくくもなる。しかしながら、そのようなコミュニケーション上の障害をもつ方々が生活する環境において、動物が登場しボランティアが動物の言葉や考えを推察し、それが橋渡ししとなって、動物に行動を説明し意味づけしていくことが可能になる。そして、参加者にはより自由で柔軟な発想が表現され、そこには一人一人の個性も表される場がつくられている。AAA/AATの社会性向上などの効果について多々示されているのであるが、その効果につながるコミュニケーションを始動するきっかけづくりをする存在もまた重要であることがこの論文からいえることである。今回はボランティアの役割の重要性についても示唆されているが、同時にこの場を支える医療者がより重度の認知症高齢者に対して動物と関わることの良さを積極的に捉えて支援の方法を考えていくことも必要である。単調な施設の療養生活の中に動物が今よりも入っていくことが出来るように、より個性のある動物の活用について研究されていく必要があるだろう。

## 謝辞

本研究協力にご快諾いただきました高齢者の皆様とご家族の皆様にご心から深くお礼申し上げます。またボランティアの皆様、協力していただきました病院の職員の皆様、AAA活動に多大なるご協力とご助言を頂きました酪農学園大学の新山雅美名誉教授に感謝申し上げます。そして、論文作成に多くの助言を頂きました、奈良女子大学大学院の麻生武教授に心より深く感謝いたします。本論文は、奈良女子大学大学院に提出した博士論文の一部を加筆修正したものです。また本研究はJSPS科研費18592403の助成を受けたもので

す。

#### 参考文献

- Banks M R and Banks W A. 2002. The effects of animal-assisted therapy on loneliness in an elderly population in long term care facilities. *Journal of Gerontology*, 57 (7), M428-M432.
- Edwards N E and Beck A N. 2002. Animal-assisted therapy and nutrition in Alzheimer's disease. *Western Journal of Nursing Research*, 24 (6), 697-712.
- 藤崎亜由子. 2000. ペット動物との会話と内的状態への言及. 人工知能学会研究会 SLUD 言語・音声理解と対話処理研究会第30回資料, 47-52.
- 藤崎亜由子. 2002. 人はペット動物の「心」をどう理解するか. *発達心理学研究*, 13, 109-121.
- 本間 昭, 新名理恵, 石井徹郎, 長谷川和夫. 1991. 年期痴呆を対象とした精神機能障害評価表の作成. *老年精神医学雑誌*, 2, 1217-1222.
- 金森雅夫, 鈴木みずえ, 山本清美, 神田政宏, 松井由美, 小嶋永美, 竹内志保美, 大城 一. 2001. 痴呆性老人デイケアでの動物介在療法の試みとその評価方法に関する研究. *日本老年医学会雑誌*, 38, 659-664.
- Katcher A. 1981. Interrelations between people and pets. Fogle, B. Edney, A. (eds.). Springfield, Ill. USA: C. C. Thomas, 41-67.
- 小林敏子, 播口之朗, 西村 健, 武田雅俊, 福永知子, 井上 修, 田中重実, 近藤秀樹, 新川久義. 1988. 行動観察による痴呆患者の精神状態評価尺度 (NM スケール) および日常生活動作能力評価尺度 (N-ADL) の作成. *臨床精神医学*, 7 (11), 1653-1668.
- 鯨岡 峻. 1997. 原初的コミュニケーションの諸相. ミネルヴァ書房. 京都.
- 鯨岡 峻. 2006. ひとがひとをわかるということ: 間主観性と相互主体性. ミネルヴァ書房. 京都.
- MacCabe B W, Baun M, Speich D and Agrawal S. 2002. Resident dog in the Alzheimer's special care unit. *Western Journal of Nursing Research*, 24 (6), 684-696.
- 真野充弘, 内苑まどか, 西村 健. 2003. 痴呆性高齢者に対するドックセラピーの試み. *日本痴呆ケア学会誌*, 2, 150-157.
- Marx S M, Cohen-Mansfield J, Regier N G, Dakheel-Ali M, Srihari A and Thein K. 2008. The Impact of Different Dog-related Stimuli on Engagement of Persons with Dementia. *American Journal of Alzheimer's Disease and Other Dementias*, 15, 1-9.
- Motomura N, Yagi T and Ohyama H. 2004. Animal assisted therapy for people with dementia. *Psychogeriatrics*. 4, 40-42.
- Odendaal J S and Meintjies R A. 2003. Neurophysiological Correlates of Affiliative Behaviour between Humans and Dogs. *The Veterinary Journal*, 165 (3), 296-301.
- Pet Partners. 2013. What is AAA/T? <http://petpartners.org/AAA-Tinformation> (情報取得 2013/10/10)
- Robb S, Boyd M and Pristash C L. 1980. A wine bottle, plant, and puppy-catalysts for social behaviour. *Journal of Gerontological Nursing*, 6, 721-728.
- Roux M C and Kemp R. 2009. Effect of a companion dog on depression and anxiety levels of elderly residents in a long-term care facility. *Psychogeriatrics*. 9, 23-26.
- Sellers D M. 2005. The evaluation of an Animal Assisted Therapy Intervention for Elders with Dementia in Long-Term Care. *Activities, Adaptation and Aging*, 30 (1), 61-77.
- Steed H N and Smith B S. 2002. Animal assisted activities for geriatric patients. *Activities, Adaptation and Aging*, 27 (1), 49-61.
- 太湯好子, 小林春男, 永瀬仁美, 生長豊健. 2008. 認知症高齢者に対するイヌによる動物介在療法の有用性. *川崎医療福祉学会誌*, 17 (2), 353-361.
- 養老孟司, 長谷川成志, 永澤美保, 鹿野正顕, 的場美芳子, 鹿野 都. 2013. 「アニマルセラピー」入門: あなたの愛犬がセラピー犬になるまで (的場美芳子監修). 一光社. 東京.

動物をかこむ場の発話から捉える認知症高齢者に対する動物介在療法を目指した試み

河村奈美子

大分大学医学部看護学科

(平成 25 年 6 月 23 日受付 / 平成 25 年 12 月 30 日受理)

**要約**：本研究の目的は、将来的な動物介在療法 (Animal-assisted Therapy: AAT) 実施に向けて、動物介在活動 (Animal-assisted Activity; AAA) に参加した認知症高齢者の反応について、その発話の数や内容を詳細に分析・分類し、高齢者に対する AAA における場の特徴やそこにみられる発話の特徴を明らかにすることである。認知症病棟の作業プログラムの中で 4 名対象者に参加してもらい AAA を 2 週おきに 6 回実施し、さらに 1 名の参加者については発話の内容を分類し特徴を捉えた。参加者の発話を捉えるうえでボランティアの発話についても分類した。ボランティアは常に参加高齢者よりもはるかに多くの声掛けをしており、参加者はボランティアに導かれるように発話の数が増減し、犬に心的状態を付与する発話が認められていることについて明らかになった。さらに犬をかこむ場を通して他の対象者が置かれている状況についても参加者が心を動かしその相手に声を掛ける行動もみとめられた。さらに AAA の社会性向上などこれまで示されてきた効果につながるコミュニケーションを始動するきっかけづくりをするボランティアの存在の重要な役割についても明らかになった。

**キーワード**：動物介在療法, 動物介在活動, コミュニケーション, 高齢者, 認知症

*J. Anim. Edu. Ther. 5: 1-12, 2014*

---